自然科学書協会会報
NSPA JAPAN
THE NATURAL SCIENCE PUBLISHERS' ASSOCIATION OF JAPAN
発行人｜金原　優
編　集｜広報委員会

■ 2013年度自然科学書分野のまとめと2014年のトレンド予測
サイエンスライター　森山和道

■ 自然科学書協会講演会2014

■ 新年会員懇親会報告ほか

2014.4.15　NO.2　（通算72号）

一般社団法人　自然科学書協会｜〒101-0051　東京都千代田区神田神保町1-101｜神保町101ビル1階｜TEL 03-5577-6301｜http://www.nspa.or.jp/

●・自然科学書のこれからを考える・●

二〇一三年度自然科学書分野のまとめと二〇一四年のトレンド予測

サイエンスライター　森山　和道

出版不況と言われて久しいが、自然科学書の分野としては、実際にどのような書籍が好まれているのだろうか。科学書の書評をされている著者に、読者の目線から、二〇一三年の総括と、二〇一四年にはどのようになっていくと考えられるか、まとめていただいた。

●二〇一三年度科学書のトレンド

「二〇一三年度自然科学書分野のまとめと二〇一四年のトレンド予測」というお題をいただいた。筆者は科学書の書評屋だが、教科書のことは知らない。なので、あくまで一般向け自然科学書に限定した話題に留まることを最初にお断りしておく。

昨年の科学書のトレンドとしては、ノーベル賞を受賞したヒッグス粒子やiPS細胞関連、メイカーブームなどの時事ネタ、一昨年度の生誕百年を受けたチューリング関連翻訳本の刊行、ダイオウイカなど深海生物人気への便乗、そして肩すかしだった彗星本といったあたりがキーワードだろう。震災後のエネルギー問題の本も引き続きそれぞれの立場からの刊行が続き、いっぽう地震そのものの関連本は少し落ちついたように見えた。急ごしらえの便乗本はともかく、どれもそれなりの収穫はあった。特にヒッグス粒子や宇宙論関連の本は刊行数も多く読み応えがあり、複数を読み合わせることで理解を深めることができた。脳科学関連では、特に経験的な主観や幸福感といった人の人生にとって大事なところに科学的な視点で迫ったしっかりした本が目立ち始めており、このジャンルはこれから読者獲得が期待できそうに思える。

個人的に一押ししたいのは情報という視点のパースペクティブを示してくれた『インフォメーション　情報技術の人類史』（ジェイムズ・グリック／新潮社）だ。なお筆者は「良い本」とは身の回りの何かしらを見たとき、これまで見えなかったものが感じられるようになる本、いわば世界を見る解像度を上げてくれる視点や知識を与えてくれる本のことだと思っている。

●苦戦する科学書

出版業界は入るのは難しいが入ったあとはダラけた人が多い不思議な業界だ。しかし頑張っている編集者の方々もいる。彼らのおかげで「良い本」もいっぱい出ている。今年度以降も歯ごたえがあって頭のなかをかき回してくれる「良い本」が出続けることに疑問は持っていない。しかしながら商品として見ると昨年は自然科学分野の垣根を超えて爆発的に売れた、あるいは強烈な印象を残したものは少なく、いま一つだったなあというのが大方の見方だろう。

取次のベストセラーランキングを見ても、科学分野の本らしきものは「新書ノンフィクション」のランキングに登場しているNHK出版新書『知の逆転』くらいしか見当たらない。強いて言えば二〇一二年に刊行されて引き続き売れていた文藝春秋『一三七億年の物語』と、ビジネス書の枠の中で統計関連の本がいくらか読まれていることも科学書関連と言えなくもない。あとは自己啓発本ばかりだ。

まさに出版不況だ。書店からは科学書や技術書の売り場そのものが大きく減少している。大型書店ですら科学書売り場が棚一本しかない書店もある。これでは売れるわけがない。売っていないのだから。文芸は「本屋大賞」で持ち上げられているが、科学書は書店員から好まれる本ではなくなっている。そして消費税増税によって、ただでさえ高い単行本の値段はさらに上がる。電子書籍？　科学書はまだほとんど電子化されていない。舞台にも立っていない状態だ。

出てくる結論はただ一つ。売り上げのさらなる減少である。これが今後の自然科学書業界の確実なトレンドだ。

●「堅い本」を読みたい人はいる

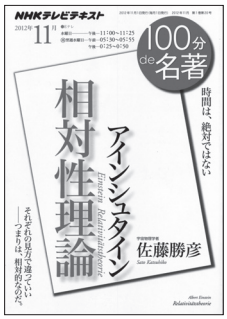
しかし、「堅い本」は全く売れないのかというと、そうでもないらしい。

筆者の知人にＮＨＫＥＴＶ（教育テレビ）で「一〇〇分ｄｅ名著」という番組を作っているＮという男がいる。

「一〇〇分ｄｅ名著」とは、古今東西の名著を二五分×四本の番組で解説する番組だ。

取りあげる本はロシア文学や古代中国の思想書や日本の古典など。名前は誰もが知っているが実際に読んでいる人はあんまりいない、そんな本の数々である。科学分野ではアインシュタインの「相対性理論」が取りあげられている。いわば国語の授業のテレビ番組版である。

この番組はテキストをＮＨＫ出版から出版している。このテキストがずいぶん売れているそうだ。一つの本で一冊のテキストになっていて、各々数万部は売れているという。テキストだけではなく、取りあげた本そのものも売れるそうだ。そのあたりは読者諸氏の一部は当事者として御存知だろう。ちなみに一番売れたのは「般若心経」だそうだ。確かな思考の道筋や、生き方の指針となる本が求められているらしい。



「100分 de 名著　相対性理論」（NHK出版）

堅い本の読みどころを教えてほしいと思っている人たちは存在している。電車のなかで本を読む人の姿は激減した。だが基本的な教養を身につけたいと考えている読者は確かにいる。現代を生きる偉人賢人にインタビューした『知の逆転』が売れたのも理由は同じだろう。確かな知識や知恵、あるいは優れた洞察を「かたい本」を通して身近に感じたいと考えている人たちは存在している。となると問題は、どうやってそこにリーチするかということになる。

●著者自らがメディア化

そんなことは分かっている、やってますよ……などと言う人たちも多い。はいはい。でも、本当にやれることを全部やってますか。

たとえば検索大手のＧｏｏｇｌｅはＡｄｗｏｒｄｓというマッチング広告を収益の要としており、ネット上の多くのブログそのほかにこの広告が表示される。ではＡｄｗｏｒｄｓに新聞の三段八割のような広告を出稿したことがある出版社は、どれだけあるだろう。新聞のほうが書籍雑誌の読者とは親和性が高いのだと新聞の広告担当者は言う。だが本当にそうだろうか。少なくとも自著の宣伝をツイッターで盛んにツイートしている人たちは、そうは思ってないようだ。

確かに新聞は、高齢者との親和性は高い。もしかすると知的な読者の多くは既に高齢者かもしれない。だが若者が紙の新聞から離れつつあることは既に多くのデータから明らかになっている。若い人にも読んでほしいと思うなら、彼らが日常接触する媒体に情報を出すべきだ。

また、著者が自分自身をメディア化する試みを行う人たちは以前からいたが、科学書では少なかった。しかし、ここにも新しい流れをつくり出そうとしている人たちが出て来た。フランスでクマムシの研究をしている若手研究者の堀川大樹氏は、自分自身の人件費を自腹で賄うことを目指してブログを開設、有料メールマガジンを配信し、それらの内容を『クマムシ博士の「最強生物」学講座』（新潮社）として本にまとめて出版した。堀川氏自身がデザインして展開しているクマムシのキャラクタービジネス「クマムシさん」も順調でクレーンゲームの景品にもなるという。

堀川氏の知人で研究者仲間のバッタ博士こと前野ウルド浩太郎氏も日経ＢＰ社のウェブサイトで連載を行ったり、「ニコニコ学会β」のようなネットユーザーイベントで人気を博している。「ニコニコ学会β」はユーザー参加による研究の世界の可能性を模索する研究会を中心としたイベントである。高度な知識や見識を持つ在野の一般市民が増えている現代では、エライ先生が無知蒙昧の民に知らないことを一方的に教えてやろうといったような旧来型ではないアウトリーチがあり得るかもしれない。

堀川氏のような手法は、誰にでもできるわけではない。むしろできない人のほうが多いだろう。だが自分自身で売り出しにかかっている人たちを後押しすることは出版業界にとってマイナスではないと思う。

●科学書を話題にするために

科学書の書評屋をやっていて残念に思うことは色々あるのだが、一番残念なのは、科学書の話ができる場所がないことだ。科学書の話を肴にして盛り上がるということが、まず、ない。相手が出版社の人であってもだ。とにかくみんな本を読んでいないのである。だから盛り上がりようがない。

元マイクロソフト社長で投資家の成毛眞氏らによる「ＨＯＮＺ」のような場も、そういう盛り上がりを期待して作られたコミュニケーションスペースなのだろう

「HONZ」Webサイト（http://honz.jp/）

と思う。成毛眞氏個人は確かに科学書のファンだが、ただ「HONZ」のウェブを見ている限りでは、ビジネス書の派生として科学書が消費されているように感じる。だとすればいつまで続くのかやや疑問である。

何より、彼らに続く動きが他に見えないのが残念だ。日本人口によって制限されている市場の狭さはいかんともしがたいのかもしれない。

何にしても、読者がいればいるほど、分野の展開には様々な可能性が出てくるし、少なければできることは限られてしまう。

そしてみんな、それなりにできることはやっているのかもしれない。だとすれば足らないのは、「みんながやっていること」の「編集」だろう。科学書の話題を、少なくとも本好きの人たちの口の端に上らせるようにする。そんな優秀な編集者の登場を期待する。そのためにはまず、出版社の人たちが本を買って読むことが重要だと思う。せめて出版社での打ち合わせのときくらい、「あれ読んだ？」「読んだ、読んだ」、そんな当たり前の会話がしたいのである。

森山　和道（もりやま　かずみち）

サイエンスライター、科学書の書評屋。一九七〇年生。広島大学理学部地質学科卒。NHKディレクターを経て、現在は科学技術分野全般を対象に取材執筆を行う。特に脳科学、ロボティクス、インターフェースデザイン分野。研究者インタビューを得意とする。

訃報

◆坂本　尚様（一般社団法人農山漁村文化協会 元副会長）が平成二五年一二月二一日にご逝去されました（八四歳）。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

坂本様の当協会の役員のご経歴を左記のとおりです。

平成三年～六年・一四年　監事

平成七年～一三年　理事

ここにご生前の坂本様の当協会への多大なるご尽力に敬意と感謝を申し上げます。

在りし日の坂本　尚様

◆当協会会員社で、代表者登録をされておりました内田　悟様（株式会社内田老鶴圃　代表取締役会長）が、去る二月二二日にご逝去されました（享年七八歳）。ここに内田様のご生前の当協会へのご理解とご協力に深い感謝を申し上げますと共に、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

（広報委員会）

■第六三期理事会・委員会開催一覧（二〇一四年一月～三月）

●理事会

・一月一六日（木）一月定例理事会／一〇時三〇分～一一時四五分　日本出版クラブ会館

・二月二〇日（木）二月定例理事会／一五時～一六時三〇分　日本出版クラブ会館

・三月二〇日（木）三月定例理事会／一五時～一六時四五分　日本出版クラブ会館

●専門委員会・特別委員会

・一月一四日（火）広報委員会会報小委員会／一五時三〇分～一六時三〇分　コロナ社

・一月一四日（火）広報委員会／一六時三〇分～一七時一五分　コロナ社

・一月二八日（火）販売・出展委員会自然科学書フェア小委員会／一六時三〇分～一七時三〇分　日本出版クラブ会館

・一月二九日（水）研修委員会／一五時三〇分～一六時三〇分　日本出版クラブ会館

・二月一三日（木）販売・出展委員会国際小委員会／一六時～一七時三〇分　學士會館

・二月一四日（金）常務理事会／一七時三〇分～一八時三〇分　小川軒

・二月二一日（金）販売・出展委員会東京国際ブックフェア幹事会／一五時～一七時　日本出版クラブ会館

・三月一一日（火）販売・出展委員会全体会／一六時～一七時三〇分　日本出版クラブ会館

■事務局だより

〈当会代表者変更〉

株式会社内田老鶴圃

旧代表者：内田　悟

新代表者：内田　学

■第六三期／第六四期広報委員

〈担当常務理事〉

宮部信明（岩波書店）

〈委員長〉

牛来真也（コロナ社）

〈委　員〉

吉原　隆（家の光協会）

桑原正雄（岩波書店）

竹西素子（オーム社）

稲沢　会（共立出版）

矢吹俊吉（講談社サイエンティフィク）

大井隆之（コロナ社）

松田和貴（電気書院）

遠矢良太郎（南江堂）

増田素美（丸善出版）

編集後記

今回、今までの会報とは少し趣を変えて、科学書の書評を書かれている森山和道さんに自然科学書のトレンドについて執筆をお願いしました。いただいた原稿は、出版社で編集者として仕事をしている身としては、なかなか痛い指摘もたくさんありましたが、紙、電子書籍といった媒体の違いだけでなく、広報も含め、いかに読者に届けて行くかを改めて考えさせられました。

世界的な発見や発明があっても、その技術そのものではなく、研究者をタレント扱いするといった、本質ではないところで話題になる状況がありました。それにがっかりするのではなく、話題になった状況を利用して、関心を持ってくれた人々の一部でも科学や技術の世界に引きずり込むような、そんな本を作らなくてはと思った次第です。

（M・T）

東京国際ブックフェア二〇一四

東京国際ブックフェア（TIBF）二〇一四が、七月二日（水）から五日（土）までの四日間の日程で、東京ビッグサイトにおいて開催されます。

当協会では、例年と同じく三・五小間のブースを出展します。今年は「ビギナーにおすすめ！目で見るサイエンス」と「統計学はおもしろい」をテーマに特設コーナーを設置し、展示販売を致します。会員各社から多くの出品をお願いするとともに、お誘い合わせの上、多数のご来場をお待ち申し上げます。

自然科学書協会講演会二〇一四

今年も自然科学書協会講演会を七月二七日（日）に開催いたします。時間は午後二時三〇分から四時一〇分まで、場所はアルカディア市ヶ谷（私学会館）（東京都千代田区九段北四―二―二五）となっており、聴講は無料です。なお、昨年と場所と時間が変わっておりますのでご注意ください。

講師は発酵学の第一人者である東京農業大学名誉教授の小泉武夫先生にお願いいたしました。講演のテーマは「わが心に残る発酵食品」となっています。「食の冒険家」を自認し、テレビでも活躍する小泉先生が、世界中をまわり食してきた発酵食品を紹介するとともに発酵の魅力についても講演される予定です。会員社の皆さまのお越しをお待ちしております。また、友人、知人、関係者の方など多くの方に告知いただけますようお願いいたします。

小泉武夫先生

お申込方法は、自然科学書協会のホームページ（「自然科学書協会」を検索してください）のトップページにあるバナーをクリックして申込ページへ移動し、必要事項をご記入ください。左記QRコードから、直接申込ページを開くこともできます。席に限りがありますので、お早めにお申し込みください。多くの方のご来場お待ちしております。

QRコード

（広報委員会）

新年会員懇親会報告

一月一六日（木）、一月らしい凛とした空気と雲一つない冬晴れのもと、正午から新年会員懇親会が日本出版クラブ会館で開催され、会員各社の代表をはじめ四一名が出席しました。今までは新年会員集会があり、そこで理事長をはじめ、各専門委員長から今年の抱負などを発表した後に懇親会となる形式でしたが、昨年一二月に年末会員集会を行った経緯もあり、今期は賀詞交換の場となる懇親会のみの開催となりました。

金原　優 理事長

本郷允彦 相談役

南條光章 専務理事

開会の挨拶として金原優理事長より「権利問題を始め、税率変更など、取り組むべき諸問題はあまたあるものの、専門書出版社の集まりである自然科学書協会として、会員各社の協力を得て、一体となって取り組んでいきたい」との挨拶がありました。

会場の様子

引き続いて本郷允彦相談役の乾杯により杯を上げ、それを合図に会場内では食事と杯を片手に近況報告や情報交換を行い、交流を図る参加者の姿が会場内の各テーブルで見受けられました。かくも楽しく賑々しい懇親会は、南條光章専務理事による中締めの挨拶と三本締めにより午後一時三〇分にお開きとなりました。

（総務委員長　長　滋彦）